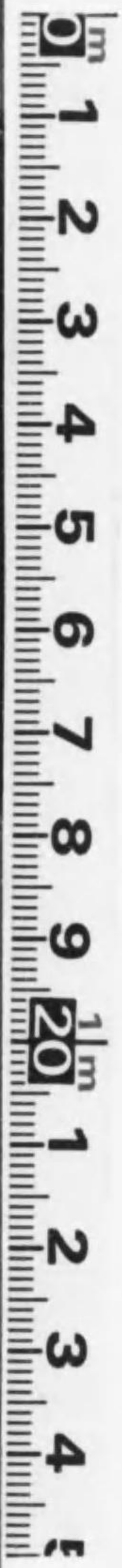


特260

453

羽 胡 藤 杜 六
 衣 蝶 恙 浦 六
 十一



始



260
特453

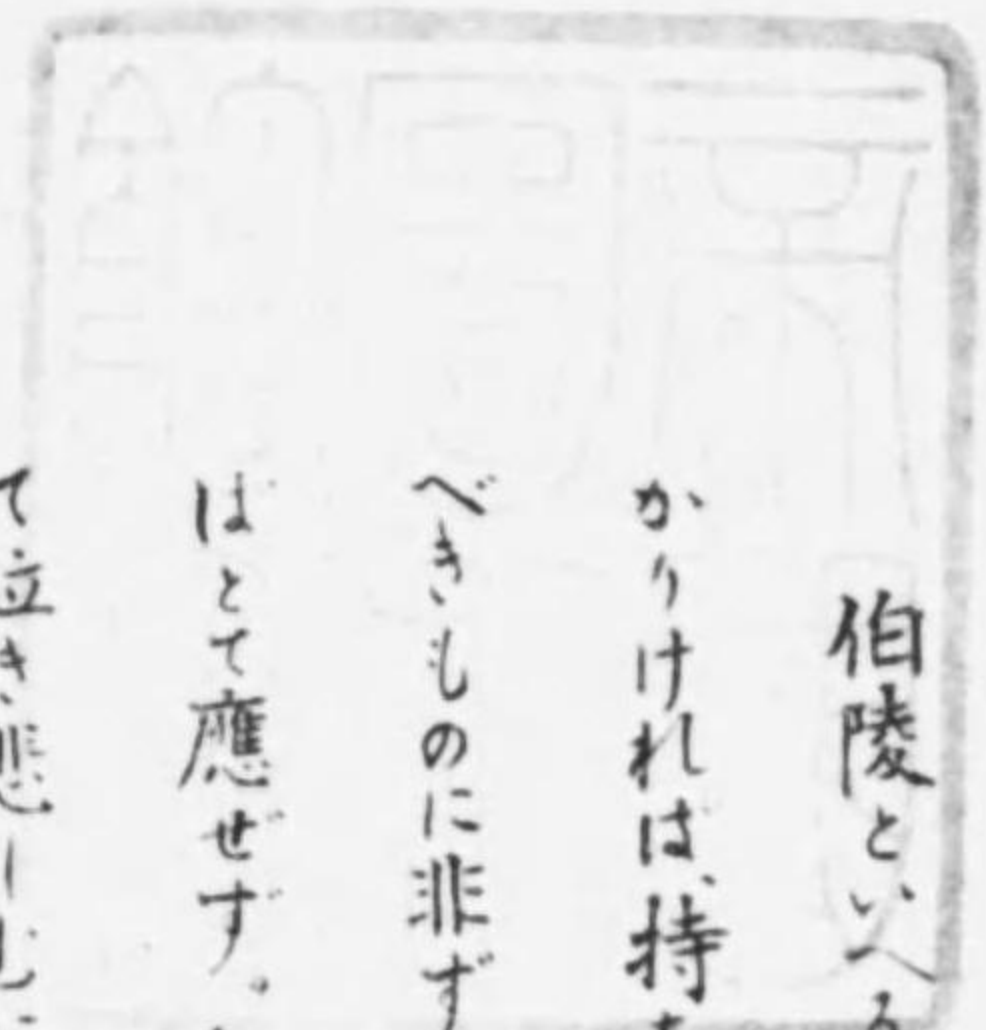
坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧心鈔校

羽衣

梗概

(所) 駿河國三保の松原

(季) 三月



伯陵といふ漁夫三保の松原に上り浦の景色を眺むる所に一つの松の枝に美しい衣か
 かりければ持ち歸らんとせしに、美しい女出て来り、それは天人の羽衣とて容易く人間に與ふ
 べきものに非ず元の如くに置き給へといふ。漁夫は之を聞きて益々喜び國の寶ともなるべけれ
 はとて應せず。されば天女は衣なくては飛行の道も絶え天上に歸る術も無しとて、空を仰ぎ
 て泣き悲しむに、漁夫も憐れを催し、天人の舞を見せ給は、衣を返し申すべしといふ。
 天女はいと喜びて羽衣を纏ひ天上の有様をのべ、月宮の舞をまじ、君が代の限りなきを壽
 き、遂に霞を分け雲に入り、そのまゝ空高く姿を隠しけりとす。



羽衣 (三番目)

役別	装束	附
シテ天女	面增女(小面三) 髪蔓 髪蔓帯 平元結 天冠 着付箔 腰巻結箔 腰帯 扇(物着ニテ長絹)	
ワキ 漁夫伯陵	着付段腰斗目 白大口 水衣 腰帯 扇	
ワキツレ 漁夫二人	ワキ同装(但無地腰斗目)	

作物 松立木 釣竿 三本

羽衣

^{三ツ人} 月ツの上保一七浦三舟人の浦人
 嗚カガぐ浪ハヤあミまミまミ 是コ保ラ七松コ系ラに
 伯陵ハカとレ中レ漢ギ吏ヨにフくフハミ三人上人の上方上里上の
 好山コウよウモウ忽クちモ不タ起ナりマ一オ楼コのノ明イ月デ
 にア雨メ初ハめジてハまジれリ。実ゲ長ニ深ノなるカ

潮歌

三

時^トもや春^ハのま^ハ又^ハ松^ハ京^ハの浪^ハ立^チ
續^クく^ル影^ハあ^リ月^ハも^ハ跡^ハり^レ此^ハ天^ハの京^ハ
及^ビび^キきた^リ牙^ハの^ハ眺^メふ^も心^ハそ^ラ成^ル
ま^ハあ^ハあ^ハ中^ハの^ハ心^ハ中^ハの^ハ心^ハ中^ハ
清^クと^ハ深^クなる^ハふ^ハと^ハ保^ハの^ハ松^ハ京^ハよ^ハだ^ハち^ハ
は^ハま^ハい^ハも^ハ海^ハに^ハん^ハく^ハ風^ハ向^ハふ^ハ

こゝろ
我^ハ之^ハ保^ハの^ハ松^ハ京^ハよ^ハら^ハう^ハう^ハ浦^ハの^ハま^ハあ^ハや^ハ
の^ハこ^ハ風^ハは^ハ病^ハ人^ハ多^ハき^ハい^ハふ^ハ母^ハあ^ハ
松^ハ常^ハ盤^ハの^ハ声^ハそ^ハう^ハ波^ハ音^ハさ^ハり^ハ
春^ハなら^ハら^ハ吹^ハも^ハ長^ハ深^ハき^ハ影^ハ月^ハふ^ハ
せ^ハで^ハ人^ハや^ハゆ^ハら^ハん^ハ待^ハて^ハ志^ハさ^ハ
ま^ハの^ハ深^ハく^ハ浪^ハは^ハい^ハん^ハて^ハ釣^ハ
せ^ハで^ハ人^ハや^ハゆ^ハら^ハん^ハ待^ハて^ハ志^ハさ^ハ

眺むるよよ。虚室ふたの境の幸樂
 笑へ。異香可方お華事ぞ。是は事と
 思ひぬ。あはれ。あはれ。松よ。あゝ。あゝ。衣
 掛事。う。い。は。あ。う。と。れ。い。色。香。あ。い。ふ
 して。常。の。衣。あ。う。ら。ん。い。う。極。あ。う。て
 悔。の。ち。あ。い。人。に。い。ふ。ん。せ。家の。衣。あ。い。
タカラ

なまご。あ。い。あ。い。さ。 い。か。け ち。あ。い。〜
 其。衣。い。は。あ。の。ふ。て。何。し。は。れ。な。ぞ
ソノコロモ コナタ コカ コカ
 是。い。捨。ひ。ら。衣。に。こ。ゆ。程。お。取。り
ホド ト カ
 やよ。 夫。の。羽。衣。と。て。容。易。く
ソレ アス タヤ ス
 人。ら。ふ。よ。あ。い。物。は。い。ら。ぬ。さ。し。の
ニンゲン アタ
 如。く。に。あ。い。ぬ。く コカ ち。あ。い。の。ち。主
オキ スレ

と。おのづから仙人として海へまはるるをうらやま

あらぶ末世のきき持よらるるをうらやま。

酒の家にならぶをうらやま。夜ぞうとて

事タカラのうらやま

かゝらぬ羽衣

なしてのうらやまの道も終え。天よよ

かからぬ事なつらむをうらやま。はつとて

ぞ。ただひびき コトのうらやま

も。まじく 伯陵 ヒコちからむをうらやま

け。まにかな トのうらやまの羽衣をうらやま。

け。まにかな タチのうらやま。今 コノをうらやま

天人も。まじく トのうらやまの如くは

け。まにかな コトのうらやま。地 チも

位^スめ^ス下^ゲ界^{カイ}な^ルり^コと^カや^カあら^ん
 か^クや^カら^んと^カ悲^カめ^カど^カ伯^カ陵^カ
 衣^モと^モぬ^モさ^モぬ^モち^シら^ラ及^ズズ^シ
 せん^カが^シよ^ト日^日上^上波^波の^波落^落れ^れま^まう^うづ^づら^ら
 く^クさ^サい^イし^シた^タも^モ志^シを^ウく^クと^ト
 天^天人の^人お^お妻^妻も^も目^目の^目前^前お^おも^もて^て浅^浅ら^ら

一^一や^ヤ天^天の^天お^おめ^めり^りさ^さけ^け日^日見^見れ^れた^た
 落^落た^たつ^つ雲^雲路^路ま^まど^どひ^ひて^て行^行方^方お^おも^もさ^さも^も
 日^日中^中一^一室^室お^おい^いし^しら^らめ^めく^くお^おま^まの^の音^音
 ま^まし^しお^おま^まの^のあ^あら^らか^か上^上加^加陵^陵頻^頻か^かの^の
 声^声今^今更^更ま^まを^をつ^つら^らあ^ある^る
 雁^雁金^金の^のゆ^ゆり^り天^天路^路を^をゆ^ゆば^ば懐^懐り^りし^しや^や

トリエー
 子ぎらうのえの沖津波はうゆら
 雲月の堂ふ吹たなうや
 しふやれは姿をとんやせは鐘に
 側ぐくは復ふ衣をぬーや
 せらにさふ あら嬉しやけ方へ
 鐘のうや
 暫承及びひたる夫人
 シバラク ウケタマハ

のお祭。明今う後にて奏しあは。
 衣をぬーや
 天上へゆらん事を得たり。けは小
 通もはらば人なるの法抄の形えは舞。
 月宮をぬららば舞曲あり。今
 愛して奏しつ。世の後人に傳ふ

庵一^{サリ}去^{マヅ}好^{カヘ}つら。羽衣な^{コノ}つて^{サレ}い^ハあ^ハふ
海^{マヅ}一^{カヘ}先^{コノ}せ^{サレ}一^ハた^ハじ^ハ強^{コノ}く^{サレ}い^ハあ^ハふ
衣^{コノ}をか^{サレ}く^ハあ^ハふ。舞^{マユ}曲^{キョク}を^ハた^ハお^ハし^ハん
甚^マ修^シふ。天^{アタ}よ^ハや^ハら^ハぐ^ハり^ハ強^{コノ}き^{サレ}ん^ハか
い^ハや^ハ敷^{カタ}ひ^ハ人^{ヒト}る^ハよ^ハあ^ハり^ハ。天^{アタ}ふ^ハ強^{コノ}り^ハ
あ^ハら^ハ物^{モノ}を^ハ上^{ウヘ}ら^ハ知^チう^ハ一^ハや^ハあ^ハら^ハと^ハて^ハ。

羽衣^{ハネ}を^ハて^ハ一^ハあ^ハら^ハれ^ハ。あ^ハら^ハ女^メは^ハ
衣^{コノ}を^ハう^ハけ^ハ。貴^{ケイ}衣^イ裳^{シヤウ}羽衣^{ハネ}の^ハ曲^{キョク}を^ハ
な^ハ一^ハ天^{アタ}の^ハ羽衣^{ハネ}月^{ツキ}ふ^ハあ^ハら^ハ一^ハ
雨^{アメ}ふ^ハ潤^{ユル}ふ^ハた^ハれ^ハ袖^{スズメ}。一^ハ曲^{キョク}を^ハか^ハあ^ハら^ハで
ま^ハふ^ハと^ハや^ハ。東^{アヅマ}好^{アツ}び^マの^ハ強^{コノ}河^{カハ}勢^セ。
け^ハ時^{トキ}や^ハ始^{ハジ}め^メあ^ハる^ハら^ハん^ハ。

ク
上リ

丈久世の天といひた二神おせの
 ち十方世界を定め一に空を
 かつらもなけれはとて久世の空と
 名付さるるからんはく月文殿の
 者様を斧の修理長なつよして
 白衣玉衣は夫人の教をこよよ

分りて一月おの天乙女を仕を
 定め役をたててこれも教ある
 天乙女は月の桂け身を分て
 修よ末の張河舞世ふあへる
 曲とや^{仕舞}春夜相ふけり
 久方の月桂の花やさく^{カツラ}

花うづらら笑あくる春の志ありや
面白や天ならで愛も妙ありと傳
月をよめ魚ひ路吹とあよし女の姿
志づ留まりてい松原の春は笑を
三保が磯月津見ぐるゝあまの夢
何まやまの曙たぐひ波も松風も

長瀬ある浦のよそふいその上
あめはちハ何と隔てん玉垣の
肉卵は神の清まにそ月も曇らぬ
日のおや君が代は天の羽衣稀よ
きてあ川をそ見ぬ叡ぞと
聞も妙なり東家声流く救ふの

蕭笛琴笙の候 孤雲の糸に充満
シヤウク チヤクキシン
 うつろひて みるに 浪は浮きあがりて
ウツロヒテ ミルニ ナミハウキアガリテ
 嵐ふも 降りて 冥きと せらむ
アラシ フモ フリテ ムスビキト セラム
 白雲の袖ぞ 妙なる 南垂帛命
ハクワン ノソデゾ マウナリウ ヨウメイ
 月天子 本地大勢至
グツ テン シ ホン チダイ セイ
 阿の川
アノカハ

抱びた 舞の曲
アソビタ マウノク
 天津御座 緑の衣
アマツミマド リョウノイ
 霞の衣
カスミノイ
 裳 左右た 左右さ けりく 花を
モスツ サイウ ササイウ
 かぎれ 天の羽袖 靡くも 返すも
カギレ テノハソデ ナビルモ 返スモ
 舞の袖
マウノソデ
 東抱びの 救に
アヅマアソビノ カズ

仕舞

序舞
ノル
 東抱びの救に
アヅマアソビノ カズ

序舞
ノル
 東抱びの救に
アヅマアソビノ カズ

其者も月の宮人ハ之五
 物中の空ふ又後月法如の類とあり。
 び新円海玉去成就七寶亮海の
 寶とあらし。酒中に是を施し給ふ
 去程よ時移りて天の羽衣浦風ふ
 相引たかびく。三保の松系浮鳴が

雲のつらたら山や富士のさる嶺。
 幽ふなりて天は清空の霞よ
 紡きて共ふをうと

胡蝶

梗概 (所) 京都一條大宮

(季) 二月

和州三吉野の僧洛陽一見を思ひ立ちて都に出で一條大宮に到りしに由ありけなる古宮ありければ寄りて静かに一見する程に傍に色異なる梅花の咲きけり近づきて之を眺め入る折りしも里の女の来れるより宮の謂を尋ね御身の名を語り給へと言へば女は蝶の春夏秋と共に花に戯るるに春猶寒く蝶の未だ生れぬ前に開く梅花に縁なきを歎き姿をかへてお僧に詞を交はし頼むなり此木の下に宿らせ給へば再び夢路にまみゆべしとて姿を消しぬやれば僧は木の下に衣片敷て休らう所に胡蝶の精現はれ妙典の功德を得て梅花に戯るを得しを喜び胡蝶の舞をまひ明行く雲に羽打ちかはし霞とともに失せにけりと

胡蝶 (三番目)

ワ	役	シ	役
キ	テ	テ	テ
詠	胡蝶の精	里	女
僧			
	角帽子 着付無地髪半日 水衣 腰帶 数珠 扇 笠	面 <small>前</small> と <small>同</small> 黒盤 天冠 <small>(蝶立物)</small> 腰巻縫箔 <small>(緋大口ニモ)</small>	面 <small>僧</small> <small>(下面ニモ)</small> 髪 <small>髷</small> 髪 <small>髷</small> 帯 着付箔 唐織着流 <small>シ</small> 扇

作物 紅梅立木

胡蝶

^{ヨリ} ^免 ^上 ^身 春立空の縁ノ ^ト ^エ ^ニ ^ト 日も長カ
 なる山ヤマ 跡ト ありト 是コト 小別シウベツ 之ノ 吉ヨシ 燈ト
 のキヨ 奥ウラ に山ヤマ 居イ の僧ソウ までマデ 我ワ 名ナ 前マヘ
 子スミ 行イ 也ヤ だダ いイ やヤ までマデ 世セ の都ト ちチ づヅ
 小ラク 符フ 子サ けケ まマ 思シ ひヒ 立チ 洛陽ラクヤウ の名ナ 不フ

旧跡をよこしんせをやこ思ひつキヤ
キウ三吉野のト嶺の深カをネよこしてキ
 く花ソはソげソなるソ風ソの吹ソくる
 象トは山ト城トをサ籠ソむソをソ方ソやソ三笠
 山ト茂トもト梢トもト楠トの葉トはト廣トきト御ト朝
 の道トをトよト花トのト都トふト慈トにトタトリト

ちキの程キよキはキあキらキ都キよキあキらキ
 けあキらキ城キ人キはキ河キにキ一キ条キ大キ壘キと
 やらキんキ中キのキ心キ勢キよキ一キんキをキたキやキ
 思キひキふキ又キ是キ成キふキとキいキれキよキ一キ者キ
 げあキるキ古キえキのキ朝キれキ檜キ皮キもキ昔キ並キ
 てむキらキ一キ思キふキのキ志キれキ草キ徹キふキよキ一キ

ある所なり。車寄りのほらある
 柴垣の隙よりつなれ。階の下ふ
 多異成梅名の今を感とみえん。
 眺めをやと思ひナガなましつゝ女か
 僧もつくと思ひコガけ梅を眺め
 眺ひゆぞ 婦コガ起や人者コガ

見えぬを妻より女性一人来りあひ。
 我よりを急サカケ給ふぞや。信サテ愛コにづく
 と申しゆぞ 拙しつゝ女始めし事コガは
 来り給ふ人ありぞ 是コガハ私シ別ウ
 三吉母の夫より店ヨの者よとてらるが。

始く愛ふ来づらん
 見別れもあはれ事あるは愛に昔の
 敬あつた言ふやう。大内も極む
 取らなれば梅を雲の上人まほ
 詩飲後経の清遊哉備し保め絶
 せぬ此のまゝ心留めてお終せん

^上あら面も白やあつらんよーある花の
 名おと今この事の嬌〜
 扱お身はい成人もは名をさのり
 おまかせ 名おの人よはかせ
 我あこの名こそまほはほ〜
^上名およは復あを心あれた山崎の

ヤマガフ

年を短くして 任む家様まゝにて

是を都のた燈コトん成コトとて

多深コトき 梅ウメがまふむらコト茂コトとて

春の月ハルノツキく 登ノボぬ影も我袖ワラビふ

梅ウメるよほひも年トシをいふ宮ミヤの軒ノキ端ハタ

苔コケむして 昔コト恋コトし我ワ者ガをバ

何ナニと明アカ石イシの浦ウラまむ 聲コエの子コあれば
宿ヤドをさふ 定めなれ身ミの死シうセや

ねこけ宮ミヤの留トド又マタは身ミ乃ナ

名ナをさふ 妻メ愛アイち物モノ借カはシさのみ

定サむも中ナカに人ヒトがコのコをコとコと

まんサリをコがコら 誠マコトに我ワのコ人ヒトがコのコと

我もよその花よ心を添ぬ梢ふ遊ぶ
 身よあれを深き愛の者身あり。
 なごやらん昔より梅花は縁なり
 車成歌きしある春毎にありひの
 後のもも紅井の梅むふ縁きたけ
 身なりと 実やまよそみ花よ

別行あご身はさるる花よ
 花ぶ胡蝶のそよのたもあまきあるま
 上はまば春夏秋をばて 草よ
 花ふ戯る胡蝶と生れは花よの
 幣の残る身よあまきとも梅花ふ
 縁あり身と歌き安成後ては傷よ

言葉をかきまひりタテマツめなる法のムク

蓮葉乃ハチス花の玉枝ウキナ頼むありキヤア

^{クセ}傳呼ツタヘのキクあまのモロコシむす子ウがサウのコていよコん

爰ユメに胡蝶の姿サウありコのコあまコらコに

世アハレの中カぞト表ハあらハレまハレのウ定めウなウれウ世ウといウひ

ながらツカサ司位サクラキもカ陰ゲをタかカいヒカル光ゲン源ジ氏の

古イニくも胡蝶ヒトトリの舞マヒ人ヒトいろトくト也

御ミ船ネはカサ飾カサるキン令ギン根ネ乃ウ瓶ヤふカます

款キマ冬マのカサ結キねスのカ衣ケをカ知ケけケ給ケふ

^上花園ハナにバ花ハ蝶トをトまトくトやト下ト草クサよト

^日秋アキまトのト虫ムシハニらニとニくニみニらニんニとニ詠ニめ

昔ユウ語ゴのユ哉カ夕ユ暮グのユ月ツキもユさユ入ル

^{コト}宮の内^ニ人目^ヲ掃^リある^ニ木の^ノ下^ニに^ヤど
^スら^セ強^ク我^ノ愛^スる^ニ必^ズほ^スあ^らべ^し
^ク夕^ノ空^ヲ消^スる^ニあ^らべ^しく^成る^ニなり。
^ユ免^ノの^ノ如^クに^アり^ふも^の中^ノ入
^{コト}あ^らせ^し世^ノの^ノ夢^ヲ醒^スる^ニま^はら^しぬ^は
^チ頼^むか^した^まい^整う^そと

^{コト}思^ひあ^らら^し法^の声^ヲあ^らや^たの
^{コト}下^ノ脚^ノ衣^ノ片^ヲ愛^スる^ニ陰^ノ影^ノ
^{コト}有^難や^い妙^典の^ノ功^力よ^し有^情
^{コト}非^情も^隔て^あり^佛果^よあ^らる^花の
^{コト}あ^ら深^き恨^をを^晴ら^しつ^つ梅^をよ
^{コト}戲^を自^ひは^らぶ^る胡^蝶の^ノ精^魂

影をれりコル有明の月も思ふ
 花のよきもいふ美しお世の姿れ
 あらまき流るる有る人の心
 いそぐ文暮ふかき言葉の花れ美
 隔るぬ梅も花翔スコキキスて上ル胡蝶も
 誘われあまの心ありてハ八重山吹ヤハハブキ

仕○
 も隔てぬ梅も花翔スコキキスて上ル胡蝶の
 音の徒も自ふ身ま交うあ中舞の上思ふ
 折り花盛る花ニ梅も心とけ
 まくもかこた宮の鳥から標せ
 内野も程近く野下花昔鳥春見を
 領し花前も蝶もリヤウ終クワたる雪残ユキ

廻らば舞の袖返すぐも面白や端舞

春フセ夏秋の花もそと日霜を

帯オビもよから菊は花お残を枝を

廻マユりくもぐおや小車の法よ

引ヒキきて御果よ至る胡蝶も歌あひの

美ホサツい舞の舞はまぐくを跡まもや

春の歌乃明初雲よ羽おらう

明けあふふを縁うちかたし

露よ終きて失ふなり

藤

梗概

(所) 越中国多胡の浦

(季) 四月

都の僧越中の國多胡の浦に到りしに、折しも藤の花の今を感りと咲きければ「常磐なる松の名たてにあやなくもかゝれる藤の咲きて散るかな」と古歌を詠みつゝ眺め居けるに、一人の女性あらはれ来り、この所は藤の名所にて「多胡の浦や汀の藤の咲きしよりうつろふ浪を色に出でぬる」の古き歌あるをば何故詠し給はぬぞとていと恨めしげに詞をかくるにぞ、僧その名を問へば吾は藤の精なりとて消え失せぬ。かくて夜更けし頃花の精は姿を現し、妙なる佛果の御法を得、意生化身讚佛衆の縁に引かれ、お僧と言葉を交はすを打ち喜び、舞をまひて興じけるが、夜の明くるにつれて再び姿を失せしとなり

藤 (三番目)

役別	装束附
シテ里女	面増(小面三) 髪 髪帯 着付箔 唐織着流 扇
後シテ藤の精	面前シテ同 髪 髪帯 着付箔 緋大口 長絹 腰帯 扇 黒垂 天冠(藤の花ツ)チモ
ワキ袂僧	角帽子 着付無地髪子目 白大口 水衣 腰帯 数珠 扇
ワキツレ 從僧二人	ワキ同装

作物 松・立木ニ藤花ヲ纏ニス(又作物ナシモ)

藤

^{己見} ^{招き三人} ^{ヨ上} ^{ひ身} 山よこ山をささぐるといふこと
 旅よ急ぐん 是、却方より出
 たる僧おてゆ。我は程ふ酒より。
 愛かこの名不旧跡を残りなく
 一見仕りてふ。又是よりの善光寺へ

あらうきと思ひの^{キヤ}上^{三人}雲をさく
白山も長深にて^カおと
高松の浪止も^{フサ}道尔^ス一
せぬ石動山^{ユズル}残まきむらや^キ
まき^マ葉^エ川^{カハ}せ^シと
はうり白^{ハク}の^ノ恋^{コイ}は^ハ暮^クそ^ソむ^ム

日^ヒ見^ミれ^レ里^リふ^フも^モ志^シは^ハき^キら^ラく
名^ナの^ノ程^{ハジメ}は^ハ是^{コノ}子^コ裁^{ツク}中^{ナカ}は^ハ日^ヒの^ノ
里^リよ^ヨ志^シて^テは^ハ又^{マタ}あ^アれ^レあ^アる^ル湖^{ミヅウミ}の^ノ水^{ミヅ}
及^ツび^ビも^モ多^タ胡^コの^ノ浦^{ウラ}も^モ有^アり^リま^マ。
立^タ家^カ眺^{ナヅメ}め^メを^ヲと^ト思^シひ^ヒ尤^{モト}も^モて^テは^ハ
誠^{マコト}も^モ及^ツび^ビも^モよ^ヨう^ウい^イや^ヤ増^{マサ}る^ル湖^コ水^{スミ}

のまゝ交よてか物うさ。又是成松よ
はとる藤の今を感ていへり。ゆ
常盤なる松の名多きよあや
なもかきる藤の笑て教う形
古の思ひ出られいあら面白
やばしこ女なま呼カケあはるは借ふ

かぶき事のかコ免け方のゆりあぐ
ゆる何まよていぞして是は多胡の
浦とて藤花の名ふあれが古人れ
よと教のまき中にも思ひぞ出る
多かの浦や江の藤の笑しより。
うつろふ波ぞ色ふおぬるよか松の

翁をば詠じ給へば松の名たてと
 号し給ふのあらむかの藤人やま
 思ひあきまや人者とも知で詠せし
 ふる事ながら 花をいやく
 岩代の 松の名してと詠せし
 心もな〜と思ひ草 詠せし
 詠

小○ 謠
 翁をば詠ふ。多胡の浦をこ
 きく舟よ藤あきと 醫相て
 好らん見ぬ人れ為とよみおき
 い花ををかく詠め給ふ恨めや
 実や思入は君ならで雅ふるんせん
 梅はむいらをも春をも知らんそ

志をこぼししむる理や
 実理りと白鳥の
 霧のあまふをほれる人誰やん
 我も誰とさ思ひ標の
 まが海しの花人とおるめせ
 身を花人と思へば
 ねむひあはに

日 松よりれる 夜の花乃
 なりとも子あまを去り行や多胡の
 浦灯は靡く松のりともよる
 えて失はけりまあふとみへく失ぶ
 きり中入 上人 暮むあまの月に出ても

うをよびてよまほめぬらかれ
鳥鳴く音も法の声は入る
花の臨仿ふ松風乃声もの妻
磯枕能ぬの夏や受すらん
しむらむなしく空は散る花の
何いなるあはれはひそめけん

不思後やな夜も更けて月写る
水さく匂ふ藤の陰より歌なきは
顔むせは花の精よそあるやらん
かりく友の精なるらら吊ひれ
法の雨よ開くも花のそら澄とぬ
是やそ歌なき出たるなり

あら有難や去りあざら二度目を
かます事何の為よそ何やらん

異性化身とらけ衣の守持て来

終教教舞とあさんと歌家より

実やもとより収言経語も

讚佛業の因縁あれバ 隔てハ

あらド 法の身也。こうる不ひハ

本にもる友の如くあり

教への外ある法述も悟りを法の

藤乃開くる心の花あれや延せれ

刈る世深の昔も本も成佛こそふ

そ忘残海ふらまや法の道ならん

年月トれニ春ノ花ヲ散リあるを深緑ニ
 夏ノ橋ヲ袖ヲあらむ自ひまぎまけバ
 昔ヲ志メのふ草ノ一ト葉チりテの秋
 ありト夕ズの月をつらみのうらら
 吹風よ小夜更て曉と鳴く千鳥ノ
 友誼声もあらむよ冬ノままのままや

春ノ花ヲ散リあるを深緑ニ
 夏ノ橋ヲ袖ヲあらむ自ひまぎまけバ
 昔ヲ志メのふ草ノ一ト葉チりテの秋
 ありト夕ズの月をつらみのうらら
 吹風よ小夜更て曉と鳴く千鳥ノ
 友誼声もあらむよ冬ノままのままや
 春ノ花ヲ散リあるを深緑ニ
 夏ノ橋ヲ袖ヲあらむ自ひまぎまけバ
 昔ヲ志メのふ草ノ一ト葉チりテの秋
 ありト夕ズの月をつらみのうらら
 吹風よ小夜更て曉と鳴く千鳥ノ
 友誼声もあらむよ冬ノままのままや

任年

袂タテうタテ形カタさタテくタテ友トモのノ嘆ウレシ藤フジ此コノ

花ハナのノ川カハらラやヤ佐サ保ホ非ヒ乃ノ袖スベのノ

緑キナンドのノ松マツよヨ無ムれるル 松マツよヨかカきキるル

くク 下シタかカれるル 松マツよヨ花ハナのノ

いろイロ紫ムラサキのノやヤ羽ハネ袖スベをヲ之ノまマをヲ舞マヒ非ヒ

うウとトやヤ吹フクへヘ 折マゲるル 柳ヤナギあアつツるル 梅ウメ

日

何ナニもモひヒらラ花ハナのノ 雲クモのノたタとトばバりリ

日

声コエのノよヨほホひヒもモ深フカみミどドりリ 英エ多タのノ

濱ハマ凡ニ多タ湖ウミのノ浦ウラ波ナミおオ教シラしシ吹フク拂ハクひヒ

花ハナもモ花ハナやヤ胡コ蝶テフのノまマれレまマさサ乃ノ

短ミジカ杖ジョウのノくクるル 横ヨコがガまマ光ヒカリりリ新アタラさまサマ

朝アサ日ヒ山ヤマひヒるルをヲ新アタラさまサマ 朝アサ日ヒ山ヤマのノ

栳コズエよ青ア葉ラや残バらんユ

杜 若

梗概 (所) 三河國八橋

(季) 五月

諸國一見の旅僧、三河國に到りしに杜若の美しく今を盛りと咲き乱れければ、沢邊に立寄り眺め入る折しも、女性一人出て来り此所は八橋とて杜若の名所なり、水行く川の蜘蛛なれば橋を八つ渡せるなりとて、伊勢物語の故事など引いて名所の謂れを語り、業平の歌をも詠してありしが遂に僧をわか庵へ導きけり、かくて女性は再び透額トウガクの冠を着し、色も輝く衣を着てあらはれ、不審して尋ねる僧に答へていふやう、衣は歌に詠まれたる唐衣、業平と契りし高子の右の御衣冠は業平の五節の舞にかむりしもの、何れも形見なれば身に添へ持てるなりとて遂に我が身は杜若の精なりしと明し、業平の東下りの由を物語り舞をよび、草木國土悉皆成佛の御法を得て失せにけりと

杜若 (三番目)

ワ キ 赤 僧	シ テ 里 女	役 別	装 束 附
扇	角帽子 着付無地袷半目 水衣 腰帶 数珠		面持次郎(小面) 髪 髪帶 着付箔 腰巻縫箔 腰帶 唐織着流し 扇 物着ニテ初冠(オヒカケ)長絹

杜若

是六部方よりかぐる僧ふくは。

我いもこの東國と云ふもは後よ。

唯今思ひまき東国新脚と志し
 ゆふづくは終枕 宿願多ふ
 かたれども同じ妻ねれよの尾張

抄

三河のよはふにさかす

潮まの程よきまをよ。三河の國

八橋とちやゆ。又はあるはの杜若。

今を感ずとての程ふ。立寄の眺め

まやとあひの。あふや光陰

とほらまを春さしむ。あもまを。

草木をなす。さやせむ。時を

忘れぬ。たのまかほよむ。や

らん。あら。の杜若やあ。

なま。人何とて。其澤よ。

体らひ。は。さん。なる

はの杜若よ。眺め入て。体らひ。よ

抄

抄

さよらふけい橋の杜若は古^カの^コも
 詠きたる名はおも^上の^ヨ名^ナを^ナれ^レ。
 色も^上一^トし^シ白^{ハク}浪^{ナミ}は^ハ京^{キョウ}の^ノな^ナで^テの^ノ花^ハの^ハ
 せうらふ^{ムラサキ}し^シ思^{オモ}ひ^ヒま^マぞ^ゾら^ラ入^イ給^キは^ハま^マして^シ。
 取^トわ^ワき^キ眺^{ノゾ}め^メ給^キへ^ヘく^ク。あ^アら^ラん^ンな^ナの^ノ
 旅^リ人^ニや^ヤか^カ ^{コト}実^マに^ニけ^ケい^イ橋^{ハシ}の^ノ杜^ニ若^ニは^ハ。

古^コの^ノ名^ナに^ニも^モ詠^ヨれ^レたる^トなり^シ。古^コの^ノ名^ナに^ニも^モ詠^ヨれ^レたる^トなり^シ。
 何^{ナニ}の^ノ名^ナの^ノ言^{コト}は^ハま^マや^ヤらん^ン承^{ウケ}り^シ度^ド
 こそ^コゆ^ユ ^{コト}是^{コト}に^ニ在^アる^ルの^ノ業^ノ平^ヘの^ノ
 歌^{ウタ}よ^ヨり^リ。伊^イ勢^セ物^{モノ}緒^オは^ハい^イま^マく^ク。
 三^ミ河^カの^ノ烟^エハ^ハ橋^{ハシ}とい^イふ^フ名^ナは^ハま^マり^リぬ^ヌ。
 安^{ヤス}を^ヲ入^イ橋^{ハシ}とい^イふ^フ水^ミ乃^ノ川^{カハ}の^ノ名^ナは^ハま^マり^リぬ^ヌ。
 安^{ヤス}を^ヲ入^イ橋^{ハシ}とい^イふ^フ水^ミ乃^ノ川^{カハ}の^ノ名^ナは^ハま^マり^リぬ^ヌ。

楊をハツ後せり。其は子杜若いと
 面白くもいらつ。或人けかきつたて
 とよみ文字を句のよよおまて。
 猿の心をよめと云れバ世下衣カラコロモ
 まつ。別はしはまのまじたるを
 来ぬる猿ぞとあふ。そ在るの

業平のけ杜若と詠ふあなう
上見あら面白や相いけ。東の深れま
 までよ。業平は下りまほひらら
して車新友仲らふ。けハ橋の愛のこら。
アタラシキオホセ程も心の奥深き名あつても
 名の如くコトまど所なれた。

昔の宿れ杜若と詠も女杜若
 ふなりし渭のむらりやまの業平の
 極楽の歌舞のそよ薩の紀現
 かきば詠をくおれ言のそよも皆
 法身説法は妙なる草木也
 も露の恵の佛果の縁を帯也

是のふくしのむらりやまの
 悲情の草木は詞をかき法の声
 佛事となすや業平の昔男の
 舞のほ女 スナハチ 是ぞ即歌舞乃
 是の薩也 カササ 是のふくしのむらり
 卒の コト 本地 ジヤク 叙 クワウ 光の影をかて

弥生の始め川に春日の祭りの
 勅使として透額スキビタの冠ユルマルを許さる
 君の意に深き故殿テシよふての
 元彼の事。當時例稀スレある故よ。
 初冠シノカとやキヤアとやタビ花ハナまきども
 世の中此一度サカの学マカ一交オトの義ガミあり

理コトバの誠マコトなりを身ミの行ユク求モト任任不
 求モトむとて東モト北キタ方カタは伊イ勢セや
 尾張オウザの海ウミはらふ立ツ波ハをウんて
 いといしくいはしはしはしは方カタの意イ起キよ。
 美ウラヤまウくもクモぬる浪ナミうあとお録レキめ
 行ユクババ信シ濃ノなるウ浅アサつあのダ嶽タケなれや

くゆる煙りの夕ぐしき 上 扱ハを

信濃なる浅らるの嶽ツは立ツつかり

日 ハ 幸ニ近人のニ見トやハとラぬハぬト号トと

ラチコチ ハ 狩ハ遊ハのハ旅ハ衣ハ三ハ河ハ北ハ河ハ子ハとハ号ト

くハ爰ニそレ名ハあるハ八ハ橋ハのハ沢ハ多ハ不ハ

旬ハ杜ハ若ハ花ハはハ京ハ北ハ由ハるハとハならハらハばハ

はハやハ一ハのハるハやハとハ思ハひハぞハあるハ於ハ人ハ

中 ハ 柀ハけハ物ハ清ハもハふハ多ハきハ事ハなハらハら

取ハ分ハけハ八ハ橋ハやハ三ハ河ハ北ハ水ハのハ底ハ意ハあハく

契ハりハ人ハのハ救ハにハ名ハをハくハふハを

かハへハ人ハすハのハ女ハまハのハやハとハ玉ハ簾ハの

光ハりハもハ私ハまハてハ花ハ堂ハのハまハれハ上ハ述

上極^キ。昔の宿^トは。かき^ハい^ハを^ハこ^ハ

日^上久^クを^ハう^ハり^ハ我^ハ昔^ハな^リり^ハあ^レい^ハ派^ニ

を^ハう^ハり^ハ昔^ハあ^リた^レあ^ハり^ハ我^ハ

昔^ハ男^ハの^ハ名^ハを^ハ留^メ。花^ハた^チを^ハ我^ハ

自^ハひ^ハう^ハる^ハ昔^ハ蒲^ハの^ハ髪^ハは^レい^ハ

何^ハま^ハそ^ハ似^ハう^ハや^ハく^ハ杜^ハ若^ハ

花^ハあ^ハや^ハ免^ハ梢^ハよ^ハま^ハハ^ハ蜂^ハの^ハから^ハ
^ヨ花^ハも^ハの^ハ神^ハ白^ハ妙^ハの^ハを^ハは^レま^ハの^ハ
^ト救^ハも^ハ志^ハら^ハと^ハ明^ハく^ハる^ハを^ハあ^ハる^ハ
^ム心^ハの^ハ杜^ハ若^ハの^ハ花^ハも^ハさ^ハし^ハる^ハもの^ハ
^ハ心^ハを^ハけ^ハと^ハず^ハや^ハ今^ハを^ハ早^ハ本^ハ國^ハ也^ハ
^ハま^ハや^ハ今^ハ我^ハを^ハあ^ハる^ハを^ハ必^ハと^ハ悉^ハ也^ハ

成佛の術法を満て我を帰す
え
きれ

小書盤歩ノ時
○所ニ働キラ入ル事アリ

六 浦

梗概 (所) 相模國(事案) 武州 六浦 (季) 九月

都方より出でたる僧、東國行脚の途次、相模國六浦の里に着きたれば、称名寺に立寄りけり。折から山々の紅葉せらるを眺めけるに、寺庭に一本の楓ありて、然も一葉も紅葉せざらざるを不審に思ひて、イモと云ふに、偶々女性一人あらはれ、昔鎌倉の中納言為相卿紅葉を見んとて、此所に來り給ひし時、山々の木々に先立ちて、此楓のみ紅葉しければ、「いかにして此一本に時雨けん山に先立つ庭のみみち葉」と詠じ給ひしが、それよりして功成り名遂げて身退くならん天の道なりとの古語を信じ、今に紅葉を止め、いつも常磐木の如くなりと言ひけり。されば僧はかくも此木の心を知り、召す御身は如何なる人ぞと問へば、我は此木の精よとて姿を消しぬ。かくて夜更け、頃再び姿を現はし、月の夜遊の舞をまひ、佛果を授け給へとて失せにけりと。

今更の祿名寺と云や、カサザツシヨウミヤウジ 又、タチヨリ 立寄
一見せむやと思ひコト、あら面白オモシロの
紅葉ともやト、今と感サカりともモシへく。
はかづら物と稱せらニシキ如ふサテ、都
にともかマレ種クのミもみぢハ、穉マよノ我レに
らめニ、そなるコ、庭ダふチ、木ヨ立ヨ、飯ノのマや

勝スグきたるカヘ、楓カのキ木ノのユがト、一ト葉トもモもみぢ
せセ、只シ、夏ナツ木コ立ダのカ、如イくレにハ、謂イのかカ、
事キハカ、やネ、人ネ来キてキ、ハカ、尋ミ、やト
思シひハ、コト女メ、コト呼コ、コトなカ、コトくコ、コト留ルハコ、コト事コを
仰オホルコト、コト是コ、コト都ト方トのコ、者シにコ、コトゆガ。
寺シ始ハ、めてシ、一ト見ミ、はカ、コトふコ、コト是コ、コトあるコト、コト楓カ

「あつてもみぢとせむ。夏木立の如く
不^レ入^レの福よ。お^レ安^レをなす^レやよ

とて
「^レ実^レ結^レぶ^レ現^レト^レ答^レめたり。是^レも^レ古^レく
鎌倉の中納^レ云^レ為^レ相^レの^レ々^レと^レ中^レし^レ人^レ。
紅葉とせんとして寺に來り給ひ
しよ。山^レの紅葉^レい^レま^レい^レなりし折^レ節^レ。
ヲ^レト^レフ^レシ

い本^一本^一は^レ限^リ紅葉^又深く^一歡^ひ
か^ウり^ーか^を。為^レ相^の々^々河^へ比^び
い^ふして^け一本^一は^レ時^雨けん^山よ
先^立つ^存の^もみ^ぢら^あと^詠よ^せ
給^ひしよ^よら^今は^レ紅葉^とと^いめ^や
是^レは^レ面^白の^詠が^やら^我救^あら^ぬ

身なきいふも。ま向の為ふかくたふり
 朽^歌残るけ一本の跡と。神の時を
 山子先さう。 善有難のま向
 やま。いよけ木の通目よ。我れ
 相^コ生^クのぶ^ハ詠^ハ家^ハれ^ハ後^ハ今^ハにも^ハみ^ハぢ^ハを
 と。免^ハ川^ハる。溜^ハま^ハい^ハの^ハ成^ハ事^ハやらん

実^ハぶ^ハ不^ハ実^ハの^ハ理^ハり。先^ハの^ハ詠^ハ家^ハぶ
 願^ハう^ハし^ハ時^ハけ^ハ木^ハを^ハよ^ハ思^ハふ^ハ極^ハう^ハま
 東^ハの^ハ山^ハ里^ハれ^ハ人^ハも^ハ訪^ハひ^ハ来^ハぬ^ハる^ハ寺^ハの
 庵^ハふ^ハ我^ハ先^ハだ^ハち^ハて^ハ紅^ハ義^ハふ^ハせ^ハる^ハの^ハ意^ハり
 かる^ハぶ^ハ詠^ハ家^ハにも^ハ願^ハう^ハま^ハき^ハ 切^ハ成^ハり
 名^ハ遂^ハげ^ハて^ハ身^ハ退^ハく^ハは^ハ是^ハ天^ハの^ハ道^ハ也^ハと

ふ。古。の。言。を。後。に。深。く。信。ず。し。ま。に
知。悉。と。し。め。り。時。常。盤。石。の。如。く
な。り。是。の。み。な。の。事。を。計。す
の。心。を。か。げ。ま。さ。く。志。後。に。名。に。さ。る
其。人。の。名。を。名。の。り。に。後。に。一
今。何。を。い。は。し。せ。り。我。に。け。し。の。精

なるが。お。僧。衆。く。い。は。し。ま。す。ふ。り。
唯。今。愛。し。来。り。た。る。今。宵。の。縁。后
志。あ。ひ。く。也。も。ま。ら。り。法。を。後。に
強。く。守。り。終。て。女。を。見。入。り。し。ん。と
夕。べ。の。空。も。冷。ま。し。た。こ。の。古。寺。の
庭。の。面。影。の。ま。が。ま。は。ら。ぬ。ふ。り。た。

子草の花をかき分てり来も起せ
 成りたりチクサ 中入
 上コト 所トコロ たり
 心よりあふ称名の
 清法の
 声も松風もをやる文もさる秋の秋れキ
 月波を渡る春の面輝られん物り
 面オモ 白シロ やヤ
 上ウヘ 所トコロ あり 種タネ の

清法やかた妙なる徳遇の縁よひり
 きて二度愛よ来りたまは愛だり
 笑カハル へ 娘メ ぶあまコト あり
 月波を渡る春の面オモ 輝ヒ ありつる女メ 人と
 おがへして敵カゲ の如くにも娘メ ぶあま
 草クサ 木キ 玉タマ 七ナナ 悉シツ 皆ケイ 成ジヤウ 佛ブツ け 妙メウ 文モン を

穀^クぐ^上ひ^タほ^{カシ}つて^ム 粧^ムを^{カシ}飾^シり^シほ^シく
 更^ク四^上季^タお^{カシ}こ^シは^ム 草^ム木^{カシ}お^シの^ムま^{カシ}しく^シれ
 時^チを^ム得^テて^ハ 花^ハ葉^エ様^{サマ}の^シ真^マ姿^{カシ}を^シ
 心^{ココロ}な^シと^シ維^キり^シふ^シ 先^{サキ}青^{アヲ}陽^{ヨウ}の^シ
 春^ハの^シ始^{ハジ}め^メ 久^イ香^{ロク}妙^{カウ}なる^シ梅^{ウメ}枝^{エダ}乃^ノ
 かつ^サ咲^キ初^{ハジ}と^シ法^{ホウ}人^{ジン}の^シ心^{ココロ}や^シ春^ハの^シ表^{ウラ}ぬ^シん

又^{マタ}様^{サマ}の^シ花^ハ盛^カり^シ 只^{ただ}愛^{アイ}の^シ心^{ココロ}を^シば^シ
 聖^{セイ}の^シ心^{ココロ}を^シも^シた^シも^シふ^シく^シあ^シあ^シ
 月^{ツキ}日^ヒ経^ケて^シ移^{ウツ}ま^シる^シ 愛^{アイ}の^シ心^{ココロ}を^シば^シ
 散^チら^シな^シる^シ面^{オモ}の^シ面^{オモ}を^シ笑^{ウツ}は^シく^シ 郊^{カウ}の^シ心^{ココロ}を^シ
 恒^{トキ}に^シ袖^{スベ}や^シ昔^{ムカシ}ふ^シま^シま^シう^シら^シん^シ 時^{トキ}経^ケり^シ夏^{ナツ}
 昔^{ムカシ}れ^シ秋^{アキ}も^シ半^{ナハ}な^シり^シぬ^シま^シき^シ 空^{ソラ}定^{サダ}め^シ

なまむら時ぬ昨日の落れをみぢ
翁も翁志ぐれ波る山の下翁
殊らぬ笑もや去にても赤の
おくれ山里の何からと海ある
都人のあはれもふた言の義は
露の情よまきつら女をよむ救に

言義をよかき純遇の縁ふりま
御法を授者法は佛深の縁とな
はく更乃月は秋をあり
笑な死神をや也さい海
秋の夜は千夜越一夜よ守ても
言葉殊りて多や清も

14. Am

17

入声の鳥も救りに
日下

鐘も朝も
月方の空の

所六浦のうら月山を吹志せり
同上

吹志せり
ぬるをみちの月よ

照そひてからくれまおはるの面

あを秘り
照ちてくる山路

新うとさへはまのるれ月のせく

くと思へたまはるの月乃かげらふ

姿となるふなり

324
652

著者權所
類不許

昭和
改本
版和

昭和四年十二月五日印刷
昭和四年十二月十日發行

訂正著作

廿三世
金剛右

金剛右

發行兼

檜常之助

發行所

東京市神田區錦町二丁目拾番地
合資會社
檜書

檜書

京都市二條通麩屋町東北角

檜書店京都出張所

終

